



東大寺の金剛力士像は、だれがつくったの



鎌倉時代の代表的な仏師である、**運慶**と**快慶**がつくったんだよ。

東大寺南大門の左右に立っている、二つの金剛力士像（仁王像ともいう）は、高さが約8.4メートルもある、大きい木像です。「金剛杵」という、古代インドの武器をもち、ひじょうにおこった顔をしています。体も、はげしい動きを表していて、まるで生きているような、**迫力**のある像です。

運慶と快慶がつくった

この二つの像は、鎌倉時代を代表する仏師（仏像をつくる職人）の運慶と快慶が、一門の20人の仏師を率いてつくったもので、完成したのは、鎌倉時代初期の1203年です。

運慶と快慶が、日本風の彫刻のスタイルを完成した

運慶の父**康慶**は、**慶派**とよばれる一派の仏師です。1180年に平氏に焼かれた、奈良の興福寺や東大寺の復興のときに活躍し、慶派を、鎌倉時代の彫刻の中心の派にした人です。快慶は、康慶の弟子です。運慶・快慶とも、奈良時代（天平時代）の彫刻や、宋（中国）風の彫刻に学びながら、日本風の彫刻のスタイルを完成した人として、知られています。

